

## 僕は後悔していない

時間はみるみるうちに立ってゆく。  
九時五十分になった。

もう来ない、確実だ。

自然と胸の中から重い暗い思いが立ち込める。

悲しさ。

かわいた涙が目を流れる。

なぜ、来ない。

僕に気がないのか。

僕の目は漠然（ぼんやり）と時計を見つめている。  
このまま家に帰る気はない。  
どうしよう。

最悪の場合をいつも僕は予想する。

やっぱり、来ない。

なぜ、来ないなら来ないと連絡してくれないのか。  
支障が生じたら返事くれと書いたのに。

そう言っても、そう思っても、もう遅い。

自分が一方的に彼女の気持ちも察しないで、  
彼女がどう何を感じているか、

僕は深く考えなかったのだ。

思慮不足の、浅はかな自分の、

都合のいい期待だったことを

僕は、自分で、証明してしまったのか。